平成二十六年十二月

聞見会新聞　Vol. 3

お念仏の会

聞

もんけんかい

『阿呆堕落偈（え〜か）』

『梵声猶雷震』（ブログ用管窺天記』より）

法話『今将談仏力（前席）』

連載『念力門』一. 天狗の門

『書いて・聞いて・味わう仏教講座』第一回

お知らせ

聞見会について

編集後記

聞見会

前川五郎松 著

『阿呆堕落偈』（え〜か）

《え》「廻心ということ ただひとたびあるべし」自分の心のデタラメに驚かされるほかない。

《お》鬼は両角あるのが見よい、蛇にウロコがあるほうがよい、栗には針があるのがよい、ズベ桃顔では、やりぞこなう。こら爺、ズベ桃顔で、尻っぽ隠いて、人をながめる古狸。

《か》悲しきかな、恥ずかしきかな。うらの若い頃をふりかえってみると、そら恐ろしい、恥ずかしい。▼強欲貪欲にだまされて、いのちよりもお金のほうが大事であったらしい。金さえあれば娑婆は安心・安楽じゃと思っていた。▼金の儲かることなら、人が迷惑しようがそんなこと構わず。それがために商売を失敗して、破産をしてもた。先祖代々・父母さまの財産を売り払い、家財道具も売りつくし、やっと精算した。▼そのとき、母親さまは居られたが、うらに一声の小言も言われなかった。▼うらは、そのとき母親・家内・子供七人家族であった。妻はそのために心配と疲れで病人になってしもうた。▼財産ははたき、無一文。たべる食糧もない。そのときは本当に娑婆がイヤになり、もう死のうと何度思ったか知れない。けど死なれん、うらが死ぬと母や妻子が路頭に迷う。死ぬに死なれず生きるに生きられず、七転八倒の苦しみ。▼このとき母親さまは、うらに言われた「お前そんなこと位で心配するな、まず働け。働けば何とかなる。働かんと金が欲しいのやから、あかんのや」。▼このときばかりは、我（が）の強いうらも泣かずに居れなんだ。それから無我夢中で働いた。▼お金は儲けるものではない。与えられるものや、自分一杯を尽くさせてもろうたところに。

林遊さんのブログより

用管窺天記

編集者お気に入りの記事を、林遊さんの許可をもらって転載しています。

梵声猶雷震[※1]

ある時、ご法話の後で、茶話会があった。冒頭、中年の女性が、「今日の話はよくわかりました。胸にしみるようないお話でした。」と述べた。とたんに和上[※2]が、「あんたぁ、あんたの頭がわかってどうなる、あんたの胸にしみてどうなる、そんな話しをしてるんじゃないんだよ。何と驚くべきご法義であったかと、梵声猶雷震、まるで雷にうたれるんだ。わかったとか胸にしみたとかは、あんたは、あんたの受け取り方を云うとるんじゃろ。ご当流は阿弥陀さまの全分他力のご法義じゃから、そのようなものは使いません！！」

ちょっと恐かったけど、浄土真宗のご法話とは、このようなものであるかと、領解した二十数年前の夏であった。聴聞に慣れてくると、聞いた法を表現をするのにいろいろな言葉を使う。そして、聞いた法を、頭とか胸（心）とか腹という身体的表現であらわすことが多い。

よく、わかった、というのは頭で理解した表現。この場合のわかるには、分かる、判る、解るの三種があるのだが、仏教的には教理の体系が解るということである。ただ、浄土真宗の場合は釈尊の覚りの内容を、いわゆる小乗仏教、大乗仏教（聖道）、中国浄土教、日本浄土教という前者を止揚した歴史的展開の上で成立しているので、御開山の真意を理解するには仏教概論とか七高僧の著書の学びが必要であろう。

身体的表現で一番多いのが、胸を突かれるとか、胸が一杯になるというような、胸という言葉に相当する感情表現である。浄土教そのものが、情意的感情に訴える部分が多々あるので、情緒表現をとる例が多い。感情は頭で思惟する理より深い部分があるので、勢いこのような表現が多くなるのであろう。ただ、感情は正確にコントロールされていないと一時の激情に駆られ「バクティ（信愛、ときに狂信）」という熱情的な絶対帰依感情に陥る恐れがある。浄土系新興教団の教祖である某氏のいう「堕ちるままのただのただじゃった」云々というのがそれである。感情移入による臨在感的把握の絶対化である。このような激情はすぐに消えうせるのであるが、自己の内部に確信という救済の体験を求

める輩は飛びつくことが多い。

三番目の腹を語頭とする、腹におちるや腹がすわるという表現は、前二者を包含し超越した不動である意が感じられる。禅仏教では、死んだ気になって一切の自我を捨てて仏道に身をささげることを「大死一番」という。浄土仏教では、善導大師の「前念命終、後念即生」の語から、大谷派の曽我量深師などは「信に死し願に生きよ」という。古い私は死んだ、新しい私の甦りという意であろう。宗教とはある意味で死と再生を説くのだが、汝は如来の子であるという本願の言説の前に死と甦りがあるのである。もちろん浄土真宗は凡夫の宗教であるから、煩悩に騙されて日々をおくるのだが、腹の底から、なんまんだぶと称えられ聞こえた声に腹を据えるのが本願の呼び声であった。

というわけで、今まで聞いた、よく使われるターム※3を、頭・胸・腹に分けてみた。

《頭》

わかる（分・判・解）、理解する、考える、合点する、観念する、領解する、使う

《胸》

思う、すく、つぶれる、一杯になる、しみじみする、焦がす、熱くなる、突かれる、裂ける、詰まる、焼ける、あたる、はれる、うつ、つかえる、しみる

《腹》

おちる、すわる、入る、響く

この三種の中で、聴聞の経験上では、男性は《頭》で聞く者が多く、女性は《胸》で聞く人が多いように思ふ。もちろん話者が語る内容にもよるのだが、最近はドカンと腹におちる話をする布教者が少なくなった。

「嘘は常備薬、真実は劇薬」という言葉があるが、小手先のおためごかしではなく、生死（生まれ変わり死に変わりの輪廻）を超える、本当の話が浄土真宗の法話であろう。仏教の輪廻説は信じられなくても、死という厳然たる自己の真相である事実の前では、あらゆるものは色あせ虚無への墜落でしかありえないのである。生まれたからには死ぬのが必然である。この死を往生と示すのが浄土真宗というご法義である。

お寺のご法座の場は、嘘だらけの世間の話ではなく、劇薬である本当の話をする場であるべきなのだが、世俗に迎合した、為になる話が多すぎると思ふ。死にたくないが、死なねばならぬ、死なねばならぬが死にたくない、死にたくないが、死なねばならぬ……と、生死に呻吟している凡夫のためのご法義なのだから。

なんまんだぶ　なんまんだぶ
なんまんだぶ

〈注釈〉

1．【梵声猶雷震】（梵声はなほ雷の震ふがごとし）。『無量寿経』往覲偈の文。
2．【和上】ここでは、故深川倫雄和上のこと。（編集者追記）
3．【ターム】術語、専門語、表現

※紙面上で読みやすくするため、原文より改行位置や句読点等を数箇所修正しました。また、ルビも追加しました。

（平成二十六年九月四日ブログ公開）

法話

今将談仏力（こんしょうだんぶつりき）（前席）

釋慈海

他利と利他と、談ずるに左右あり。もし仏よりしていはば、よろしく利他といふべし。衆生よりしていはば、よろしく他利といふべし。いままさに仏力を談ぜんとす、このゆゑに利他をもつてこれをいふ。まさに知るべし、この意なり。

［顕浄土真実行文類　重釈要義：他力釈］

本日は、ようこそ、ようこそのお参りでございます。

「いっけぇ大福のようなボンさんが出てきたなぁ」

と驚いてらっしゃる方もいらっしゃるでしょう（笑）。

普通であれば、お説教のこの場所では、まず最初に

「私はどこから来た、コレコレこう言うモンでございます。姓は何々、名は何々。歳は幾つで好きな食べ物は……」

と、自己紹介をされることも多いのですが、私の師匠は厳しい人でありまして、あんまり長々と自己紹介をしてますと、

「ご法話に自己紹介はいらん！」

とスリッパでスパーン！とね、頭をね、叩かれるもんですから、自己紹介はこのへんにしておきます。

いや、昔から越前門徒（えちぜんもんと）ちゅうのはおそろしい人がようけおるとね、日頃師匠に聞かされているのですが、昔ね、こんな事があったんですと。

ある時、まぁ、今日と同じようにお説教の場があって、同じように坊さんが仏さんの前に立ちましてね、長々と自己紹介されるんですと。

そんで、自己紹介が終わったと思ったら今度は世間話。世間話が終わって、さぁいよいよ今日の本題となりましてね、ご法話が始まったらしいんですが、そのご法話の途中で、そのお坊さん「……と、わたしは思うんです。」とおっしゃったそうです。

そしたらね、お聴聞されてた爺さんの一人が、パッと手を挙げてですね、「ちょっとちょっと！ごえんさん！わしらはね、あんたの事やら、あんたの考えを聞きに来てるんやないんや。仏さんの話を聞きに来とるんや！」

ちゅうてね、講台からそのお坊さんを引きずり下ろしたっちゅうんですから、これはまぁ、坊さんからするとおっそろしい話です。

この場所はね、仏さんの話を聞く場所でした。

坊さんの身の上話やら、世間ではこんなことあったとか、今の世の中はどうたらこうたらいうような話は、この場所で聞かんでも、テレビつけたらいくらでもやってます。

さらに言えばですね、泣いたり笑ったりする話を聞く場所でもないです。泣いたり笑ったりする話やったら、落語やら漫才やら聞きに行ったほうが、よっぽど笑わせてくれますし、駅前行ったらいくらでも泣けるいい映画やってます。「全米が泣いた！」とかね、ようあるでしょ。そういうところに行ったらいいんです。

ですけど、この場所は違います。仏様の前です。仏様の前で、仏様の話を聞く場所が、このご法話お聴聞の場でした。

さて、じゃぁ、その仏さんの話ですが、これがまぁ、難しい話です。何が難しいかちゅうとですね、仏さんの話と一口に言ってもですよ、よくよく考えてみると、私らその「仏さん」のことを知ってるかといえば、なーんも知りません。

こう言うとですね、ちょっと勉強されてらっしゃる方とかが、辞書なんかに書いてあるような意味を教えてくださる方もいらっしゃいます。

でも実はそれ、辞書やら難しい本に書いてある「言葉」を知ってるというだけですよね。その「言葉」を知ってるからといって、それを本当に知っているってことにはならんのです。

例えばですね、チョットきつい言葉ですけれど、「死ぬ」って言葉ありますね。この「死ぬ」を広辞苑で引きますと、《生命を失う。息が絶える》ってあります。

さぁ、この辞書に書いてある意味を知ったからと言って、じゃぁ「死ぬ」ってことを知った、とは言えますかね？

慈海は言えません。当たり前です。私は今まで一回も死んだ事ありませんから。たとえもし、過去に死にかけたことがあったとしても、それは、死にかけたというだけです。もし完全に死んでいながら、ここでこうやってお話してれば、それこそバケモンです。

これ、私だけの話じゃないですよ。ここにいらっしゃる方皆さんそうですよね。ですけど、「死ぬ」ちゅうことを知ってるつもりになってます。本当は誰一人として本当に「死ぬ」ちゅうことがなんなのか、本当に知っている人というのはいないんかもしれませんよね。

「仏」というのもそうです。辞書的に言えばですね、これもまた広辞苑を引きますと、《悟りを得たもの》とかあります。

じゃぁ今度は「悟り」ってなんやろと調べますとですね、《まよいが解けて真理を会得すること》とかあります。

じゃぁ、今度は「真理」ってなんや？ ってなっていきますね。

これ、ずーっと続いていきますわ。言葉の意味を、「言葉」で知っていっても、知っているような気になるだけで、でもそれは、本当知っている、とは言え

んのです。

とは言え、ここはその、わからん「仏さん」の話を聞く場所ですから、何とかして「仏さん」のことを言葉にしていかにゃぁなりません。言葉にできんもんの話ですから、難しい。とんでもなく難しいんです。どんだけ難しいかちゅうとですね、こういう言葉があるんです。

不可称
不可説
不可思議

「ふかしょう・ふかせつ・ふかしぎ」と読みます。もしかすると聞いたことある方もいると思います。蓮如さんの御文章に、

一念に弥陀をたのみたてまつる行者には、無上大利の功徳をあたへたまふこころを、『和讃』に聖人のいはく、「五濁悪世の有情の選択本願信ずれば　不可称不可説不可思議の　功徳は行者の身にみてり」。……

という御文章がありますけど、どうでしょう？なんとなく耳に、この響きを聞いたことあるという人、いませんか？

如来様の功徳はこの上ない大いなる利益の功徳で、それを御開山聖人のご和讃では「不可称・不可説・不可思議」と、おっしゃってらっしゃるわけです。

「不可称・不可説・不可思議」さぁ、では、この言葉、一文字づつ行きましょか。

まず「不可」っていうのは、「べからず」とも言います。「できん」ちゅうことですね。

「不可称」っていうのは「称」ができん。「不可説」っていうのは「説」ができん。「不可思議」っていうのは「思議」ができん。ちゅうことがこの「不可称・不可説・不可思議」ちゅうことです。

そしたら、「称」ちゅうのはなにか。

この字、今は「ショウ」と読みましたけど、他にどんな読み方ありますか。「トナエる」って言いますね。お念仏をトナえるちゅうときは、この字で書きます。「称える」。他には、「ハカる」っても読みます。

この字ね、もともとどういう意味の漢字かというと、「天秤ばかり」の意味なんです。ものをはかるっていう意味の字なんですって。天秤ばかりの片方にね、目方を量りたい物、たとえば、大福とかね、まぁそういうものを置きます。そんで、もう片方に、重り、分銅とかいいますが、そういうのを乗せます。そんで、天秤ばかりの両手が水平になるまで重りを足したり引いたして、うまく釣り合った時に分銅の重さを数えると、釣り合ったもう片方の手の、大福の重さを知ることができる。

これが「不可」。できませんというのが、「不可称」です。

ほら、時々「計り知れない」って言葉使うときあるでしょ？あれです。計り知れないっていうのは、はかっても知れん、はかるすべも知れんちゅうことです。

ちなみに、この「称える」というのを「タタえる」とも言います。「誰々の功績を称える」とか、そういうふうに使いますが、称えるためには、称える対象のことを知らないといけんわけです。その人が何をやったのか、その功績がどれくらいのことなのかを、比べて、量って、「おお、

こりゃぁ大したことだ」と理解できなければ、称えることはできんわけです。どちらにしても、「不可称」というのは、計ることもできなければ知ることもできん、当然称える事もできんということですね。

じゃ、次に「説」にいきましょか。漢字っていうのは便利ですね。その字をじっと見れば、なんとなくその文字の中に隠れているヒントを見つけることができます。この「説」で言えば、言偏がついてますから、「言葉に関する字」というのがわかりますよね。さらに、熟語を出していくと、よりその言葉の輪郭が見えてきます。「説」で言えば、「説明する」「説教する」とかいろいろありますね。「説明」というのは、モノゴトやら出来事などを、言葉で言い表して、明らかにするということでした。何かの教えたいことを言葉にして相手に伝えるから「説教」て言うんですすよね。

つまり、「説」ちゅうのは、言葉にするってことです。ということは、「不可説」というのは、言葉にできんって言うことですね。

で、次が「思議」です。これも文字をじっとよう見たらわかるでしょ。「思」は心に思うの「思」です。「議」これも言偏がつきますね。言葉のことです。「議論」とか「会議」とか言いますよね。言葉を交わして考えをまとめていくことを「議論」っていいます。それが複数の人がひとところに会してであれば「会議」となります。

ちゅうことはですね、「不可思議」とは、「心に思うことも、頭で考えることもできん」ちゅうことですね。

そうそう、よくね「不思議なことあってね」なんて言うじゃないですか。お化けの話やら、奇跡のような話なんかをそういいますよね。あれ、ホントは「不思議」でもなんでもないんです。お化けの姿を思ったり、奇跡のような話を想像したりしてるじゃないですか。

心に思って、言葉にできるということは、ホントの「不思議」ちゅうことやないんです。ホントの「不思議」ちゅうのは、思うことも、考えることもできんこと。理解も認識もできん。もっと言えば、無いのと一緒です。無いもんを、思うことも、考えることできんでしょ。

まとめますと、「不可称・不可説・不可思議」というのは、計り知れない、言葉を超えた、人間の認識や理解をとんと超えてるということです。

仏さんの話っちゅうのは、こういう話なんです。だから難しい。難しいちゅうか、人間の頭ではとうてい理解のできん世界の話です。それがこの「仏さんの話」です。そんな、とんでもない話を聞く場所が、このご法話お聴聞の場でありました。

さて、少し難しい話が続きましたんで、この辺で一旦、お休み頂きます。後席では、その「不可称・不可説・不可思議」の如来様のお働きのお話しをいたします。

なんまんだぶ　なんまんだぶ
なんまんだぶ

（次号、後席につづく）

※某所でのご法話お取次ぎを録音したものを元に、一部加筆、編集して掲載しました。

連載

念力門

念仏の力で運ばれた門の本当にあったおはなし。

一・天狗の門

その門は、特徴的なその大きな鬼瓦から、「天狗門」と呼ばれていました。

天正十九年（1591年）、当時の関白太政大臣であった豊臣秀吉の寄進によって、浄土真宗の本山である本願寺が建立されました。境内には、今でも桃山文化を代表する建造物や庭園が数多く残されています。重要文化財の阿弥陀堂と御影堂。秀吉の邸宅であった聚楽第の一部を移築し、金閣、銀閣とあわせて京都三名閣と称される国宝飛雲閣。同じく国宝の唐門は、桃山時代の豪華な装飾彫刻が見事で、眺めていると日が暮れることを忘れてしまうほどであることから、「日暮しの門」とも呼ばれていました。そのほかにも国宝、重要文化財が数多く残されているこの本願寺は、平成六年（1994年）十二月には、ユネスコにより世界文化遺産に登録されました。

この本願寺の北側にあったのが、例の天狗門です。正式には「北乃総門」と呼ばれる、本願寺の北側の総門でした。四脚唐門様式のこの門は、本願寺境内と同様に、秀吉によって寄進され、建立された門の一つでした。国宝とされた唐門と比べれば質素ながら、数百年の間、本願寺に参られ、また帰って行かれる無数の方々のお念仏の声を、黙って聞いてこられた門でありました。

元治元年（1864年）の夏、尊王攘夷を掲げる長州藩が、京都守護職であり、新撰組を配下にもつ会津藩主松平容保の排除を目指して挙兵し、京都御所西門の蛤御門で武力衝突しました。後に言う蛤御門の変（禁門の変）です。この変に伴い、京都の大半が火に包まれました。鉄砲の音とともに、京の街は手の施しようのないほど炎上し続け、東本願寺や本能寺をはじめとする、多くの寺院が焼失していきました。

この火災はみるみる火の手が広がっていく様から、「どんどん焼け」とも、鉄砲の音とともに火の手が広がっていくことから「鉄砲焼け」とも呼ばれたそうです。そしてとうとう、本願寺にも火の手が迫ってきました。想像するに、おそらく火の手に追われた町の人たちが、多く本願寺境内に逃げ込んで来て

いたことでしょう。火の粉が舞い、あちこちで鉄砲の音が鳴り響き、京の空は赤く染まっています。煙にむせながら、恐怖に震えつつも阿弥陀如来に、親鸞聖人の御影に、助けてくれ助けてくれと、お念仏を繰り返される方も数多くいたのではないかと思います。

走り回る僧侶の方々、叫びあい無事を確かめあう人々。境内に響く無数のお念仏の声。それでも本願寺の北側には、情け容赦なく火の手が迫ってきます。しかし、その前に、本願寺北乃総門、通称天狗門と呼ばれたあの門が、立ちはだかりました。かろうじてこの天狗門によって火の手は遮られ、本願寺の類焼は免れることとなりました。そして、この天狗門は、以降「火止の御門」とも呼ばれるようになりました。

本願寺北乃総門、通称天狗門とも、火止の御門とも呼ばれたこの門は、それからも、本願寺を守り、行きかう人々のお念仏の声を聞きながら、静かに時代の移り変わりを見つめ続けていました。

時代は移り変わり、二百六十数年続いた江戸幕府が朝廷に大政奉還し、武家の社会から、天皇を中心とする社会に移り変わっていきました。明治時代、大正時代を経て、昭和の時代、日本は太平洋戦争に突入ます。多くの方が戦地に赴いていかれました。最初は優勢だった戦況も、徐々に陰りが濃くなり、大きな犠牲を払いながら、日本の国は敗戦します。そして、日本の国はGHQ占領下の時代に移り変わっていきます。社会はまた大きく変化していきました。

そんな社会の激しい移り変わりの中で、ただ静かにひっそり立ち続けていた天狗門にも、再び危機が訪れます。京都の都市計画により、京都の道路や土地区画の整備が決定し、取り壊しされることとなりました。秀吉の時代から三百五十年以上、時代の移り変わりの中、時には火の粉をかぶりながらも、お念仏にすがる方々の姿を見守り続けたこの門にも、とうとう最後の時が迫ってきました。

この話を耳にした、ある男がおりました。福井県あわら市にある西本願寺吉崎別院の輪番、巨橋義信師でした。

（つづく）

当時の京都本願寺の北乃総門
通称「天狗門」

激しい時代の移り変わりの中で
静かに本願寺とお念仏される方々を守り続けた

聞見会仏教講座
@スペースおいち

書いて聞いて味わう仏教講座

毎月第四火曜日
夜七時から開講中！

聞見会では、毎月第四火曜日の夜七時から、福井駅前にあるギャラリー「スペースおいち」さんをおかりして、仏教の勉強会を開催しています。

この講座は、仏教の「言葉」を書いて、そして、それを声に出して読み、その「言葉」の響きを耳に聞いて、心で味わってみよう、という講座です。

紙に文字を書いていきますが、きれいな字を書くのが目的ではありません。

声に出して言葉を耳に聞いていきますが、発音や声のきれいさは求められていません。

心に味わっていきますが、味わい方は人それぞれです。

もちろん、知識や理解度を競う場所でもありません。ただ、仏教の「言葉」に触れて、その「言葉」がひらいて行く世界を、一緒に楽しんでいこう、という試みの講座です。

本講座では、『正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）』を毎回少しずつ書いていき、それを超えに出して読んで、そしてその言葉を味わっていく予定です。

先日行った第一回では、オリエンテーションを兼ねて、ご自身のお名前を、じっくり、丁寧に書いていただきました。そしてそのお名前を、それぞれご自身が声に出して順番に読み上げ（つまり、自分の名前を、改まって声に出して読み上げるわけです）、そして、感じたこと、思ったことなどを、みんなで話し合う、ということを行いました。

これが、思いの外面白いことになりました。自分の名前に、じっくり向き合うという経験は、日常ではあまりないことかもしれません。さらにその、自分の名前を改まって声に出して読むということは、まず経験のないことなのではないでしょうか。

名前と言うのは、「言葉」です。自分と認識している存在に与えられた「言葉」です。

紛れも無く、その「言葉」は、自分自身を指し示しています。しかし、よくよく考えてみると、実は自分自身でさえも、自身の名前という「言葉」の持つ働きについて、あまり知っていないのかもしれません。

とても新鮮な経験でした。

年末年始のこの時期、自分の名前という「言葉」の背景に広がっている世界に向き合ってみるのも、面白いかもしれません。

お知らせ

■聞見会念仏会■

聞見会では、［聞見会念仏会］を毎月開催しています。この念仏会は、ただ単にお念仏だけをする時間と場所を共有してみようという思いで始めました。

休憩をはさみつつ一時間半。それぞれが、それぞれの思いのなか、それぞれの声の調子で、ただ「なんまんだぶ なんまんだぶ　なんまんだぶ ……」とお念仏を称え、耳に聞く会座です。お楽しみとして、ご法話をお聴聞したり、法談などに花が咲くこともあります。

安心して、心置きなく、腹いっぱいお念仏出来る場所が、この聞見会念仏会です。是非一緒にお念仏しましょう！

■聞見会仏教講座■

『書いて・聞いて・味わう仏教講座』
@スペースおいち

開催日：毎月第四火曜日
時間　：夜七時～八時半
場所　：スペースおいち
（福井市中央一―十七―一
ビッグアップルビレッジ二階）
会費　：千円

※都合により日時の変更がある場合があります。詳しい日程は、聞見会のウェブサイトをご覧になるか、慈海にお問い合わせください。

■お願い■

《新聞を置いくださる場所を募集しています。》

本紙を置いてくださる場所を募集しています。次号からは、本紙を置いてくださる場所を紙面上でもご案内する予定です。

■寄付について■

聞見会の運営は、慈海がお預かりした御法礼と、会員の方等の寄付で運営されています。寄付については、慈海までご連絡ください。

■広告掲載■

本紙面上に広告を掲載いたしませんか？　詳細は左記メールアドレスまでご連絡ください。

［広告掲載のお問い合わせ］
info@monken.org

聞見会について

聞見会は、浄土真宗本願寺派僧侶 釋慈海 が代表を務める、お念仏の会です。「安心してお念仏ができる場所がもっとあったら」という思いから、この会を立ち上げました。

お念仏は易行（簡単な行）と言われますが、現代社会でも果たしてそうでしょうか。「周りの目が気になってお念仏できない」「宗教というだけで白い目で見られる」「お寺はどうも敷居が高くて入りづらい」「法話というのはどうも堅苦しい」「足が悪くてお寺に通えない」「耳が悪くてご法話が聴けない」そんな声をよく聞きます。

浄土真宗は「安心して不安を生きる」ことのできる宗教です。汚く醜くみっともなく生きて生きて死んでいける宗教です。綺麗事ではないこの現場で、どうぞ一緒に、そのままのおすくいを聞かせていただきましょう。

聞見会代表 釋慈海 拝

なんまんだぶ

編集後記

ズボラな性格のため、ズルズルと第三号の発行が遅れに遅れて、第二号から一年以上経ってしまいました。楽しみにしてくださっている方々には、本当に申し訳ない思いでいっぱいです。ごめんなさい。

毎月と意気込んでも、結局約束を破ってばかりですので、平成二十七年は、季刊誌、つまり三ヶ月に一回の発行を目指すことになりました。

また、活動資金などを心配してくださる声もよく頂いています。同時に、「もうちょっとちゃんと活動せい！」との叱咤も頂いています。本当にごめんなさい。

聞見会の活動について、ご希望やご意見ありましたら、ぜひお気軽にお聞かせください。また、新聞の発行など、活動をお手伝いくださる方も大募集中です。ご法話や新聞への寄稿も大大募集中です。いい加減な主催者ですが、どうか、お力をお貸しくださると、うれしいです。そして一緒にお念仏しましょう！

（慈海 記）　なんまんだぶ

コンテンツ

『阿呆堕落偈（あほだらけ）（え～か）』
『梵声猶雷震（ぼんしょうゆうらいしん）』（ブログ『用管窺天記（ようかんぐてんき）』より）
法話『今将談仏力（こんしょうだんぶつりき）（前席）』
連載『念力門（ねんりきもん）』一：天狗の門
『書いて・聞いて・味わう仏教講座』第一回
お知らせ
聞見会について
編集後記

次号

次号（第四号）は、平成二十七年**三月**に発行予定です。

聞見会ウェブサイト
http://monken.org

インターネット放送
「仏教どうでしょう？」
https://www.youtube.com/user/kuzjikai

聞見会新聞 第三号
平成二十六年十二月二十三日　発行
発　行　聞見会
発行人　釋慈海
編　集　釋慈海

この配布物および聞見会についてのお問い合わせは、左記までご連絡ください。

［住所］
〒919-0476
福井県坂井市春江町針原20-31
聞見会　釋慈海 宛
［電話番号］
090-3295-8969（釋慈海）
［メールアドレス］
info@monken.org

※聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶の釋慈海が主宰する聞法の会です。

※本誌はフリーペーパー（無料）です。聞見会員ならびに賛同してくださっている方々の御懇志とご協力によって発行しています。合掌